

## 1. はじめに

1947年生まれ、宮本輝は、戦後団塊の世代を代表する作家である。「向上してゆこうとしている人間を書きたい、生きてゆこうとして闘っている人間を書きたい」<sup>1</sup>という、宮本輝自身の言葉が示すように、その作風は、時代を反映し、戦後という新しい価値観に迷いながら生きる人々を励ましてきた。

また、神戸生まれの宮本輝は、東京中心の文壇に対し、地方、特に阪神間を舞台に選ぶことで、織田作之助、田辺聖子らに続く関西文学の可能性を推進してきた作家の一人でもある。

中でも、1981年に発表された『錦繡』<sup>2</sup>は、冒頭場面こそ、蔵王の紅葉と星空が描かれるものの、その中心は、西宮市香櫨園という阪神間の地域性が物語の舞台を支える作品である。

本論では、この『錦繡』に注目し、宮本輝が描く阪神間、特に西宮の地域性を考察していく。

## 2. 阪神間の〈職住分離〉文化

『錦繡』は、舞台を1980年頃とし、十年前を振り返りながら、亜紀と靖明との二人が交わす十四通の書簡のみで綴られる小説である。

ある日、亜紀は、障害をもつ八歳の息子をつれて蔵王の Gondola・リフトに乗るが、そこで偶然席を同じくした男性を見て非常に驚く。その人が、亜紀の前の夫、靖明であったからだ。十年前に靖明は、別の女性と心中事件を起こし、亜紀とは離婚していた。

小説で交わされる往復書簡は、まず亜紀から靖明へと送られる。これは、亜紀がこの文通の

主導権を握っていることを示すだろう。蔵王で偶然出会ったこの男女は、その後再び会うことなく、手紙のやり取りだけでお互いを理解し、そして再び別れていく。

亜紀は、靖明と暮らしていた時も、靖明と離婚後も、勝沼と再婚した後も、実家である西宮市香櫨園にある自宅に住む。それゆえ手紙には、香櫨園の風景がしばしば描かれることになる。

香櫨園とは、西宮七園の一つに数えられる高級住宅街である。阪神電気鉄道が関与して開園した遊園地に由来する名で、1913年の廃園後もその名が継続して用いられた。1920年に阪神急行電鉄（阪急電鉄）が神戸線を開通させると、この一帯の北側は、周辺を流れる川の名を取って夙川と呼び親しまれるようになる。阪急電鉄が夙川周辺の住宅地開発を進めることで、この辺りは、商業都市大阪と工業都市神戸で働く人々の家族を対象に、いわゆる〈職住分離〉の「住」を支える場として阪神間独特の文化発展を遂げてきた。

亜紀の父は、星島建設の社長として戦後の建設ラッシュで成功を収め、東京支社と関西本社とを往復して仕事を行っている。そのような亜紀の父にとって香櫨園は、〈職住分離〉の住居空間としての憩いの場となっている。一人娘である亜紀は、大学卒業後、結婚時は専業主婦として、そうでない時も仕事にはつかず、この住居空間で時を過ごしている。彼女は、川沿いを散歩して見聞きした出来事を、靖明への手紙にも書き込むのである。

## 3. 宮本輝の原点～川の風景

神戸市灘区弓木町の生まれである宮本輝は、三歳まで石屋川のほとりで育った。

<sup>1</sup> 宮本輝「華やぎを縫い取る」（『道行く人たちと〈対談集〉』文芸春秋、1984年）初出は、「波」1982年3月号。

<sup>2</sup> 宮本輝『錦繡』（「新潮」1981年12月）本文引用は、上記に拠った。

「海が見えて、六甲山系をあおぐ阪神地区一帯の風景は、私という人間の思い出の出発点となっている」<sup>3</sup>と記すように、宮本輝の思い出は、土地の持つ風景に支えられている。さらに、その思い出が「夙川沿いの桜並木も、母が愛した風景のひとつだった」と続くように、『錦繡』に描かれる夙川を含め、宮本輝の作品には川の風景が印象深く登場する。

宮本輝のデビュー作といえる『泥の河』<sup>4</sup>も、続く『蛍川』<sup>5</sup>も、それぞれ川が舞台となっている。『蛍川』は、1987年の映画化（松竹）でも、蛍の大群が波打って舞う場面で高い評価を受けた作品である。しかしその場面に対し、「あんな蛍、ほんとに見たのか？」<sup>6</sup>との批判も受けた。それに対して、井上靖は宮本輝に「宮本さんの心のなかには、あれだけの数の蛍が飛んでいたんでしょね」<sup>7</sup>と声をかけたという。

井上靖には、大岡昇平と歴史小説をめぐる論争があった。「『蒼き狼』は歴史小説か 常識的文学論」<sup>8</sup>がそれである。チングス・ハーンの生涯を描いた井上靖の『蒼き狼』<sup>9</sup>が、歴史小説の体裁を取りながらも、作者の独断で真実をねじ曲げているのではないかという大岡昇平に対し、井上靖は、文学作品である以上、作者は史実と史実の間に入っていかなければならないと反論した<sup>10</sup>のである。

3 宮本輝「橋の上で尻もち」（「文藝春秋」1997年6月）

4 宮本輝『泥の河』（「文芸展望」18号、1977年7月）第13回太宰治賞受賞。

5 宮本輝『蛍川』（「文芸展望」19号、1977年10月）第78回芥川賞受賞。

6 宮本輝「大雁塔から渭水は見えるか」（『新潮日本文学アルバム48 井上靖』新潮社、1993年）

7 宮本輝「大雁塔から渭水は見えるか」前掲。

8 大岡昇平「『蒼き狼』は歴史小説か 常識的文学論」（「群像」1961年1月）

9 井上靖『蒼き狼』（「文藝春秋」1959年10月～1960年7月）

10 井上靖「自作『蒼き狼』について 大岡氏の常識的文学論を読んで」（「群像」1961年1月）

「宮本さん、小説って何でしょうね。決して、学問でもない。宗教でもない。小説は、遊びです。贅沢な心の遊びです」<sup>11</sup>と言った井上靖の言葉は、宮本輝の作家活動に大きな指針を与えたと思われる。

#### 4. 西宮を描く～井上靖と宮本輝

宮本輝の初めての読書体験は、中学2年の時、寝られぬ夜<sup>12</sup>に読んだ井上靖の『あすなる物語』<sup>13</sup>であった。さらに、梅田の露店の古本屋で初めて自分の本を手に入れたときに、その選びぬいた十冊<sup>14</sup>の本の中にも井上靖の『猟銃・闘牛』<sup>15</sup>があったという。この『猟銃・闘牛』は、井上靖の小説家としてのデビュー作であり、ともに西宮が舞台となった作品である。

『闘牛』<sup>16</sup>は1947年に阪急西宮球場で開かれた闘牛大会に取材した小説である。四国愛媛宇和島から牛を連れてきて開催された。宮本輝の父の郷里は宇和島で、『地の星』<sup>17</sup>にも闘牛の場面が描かれることは興味深い。

『猟銃』<sup>18</sup>は、『錦繡』と同じく、書簡体小説である。ある詩人のもとに、穰介という見知らぬ男から、自身に届いた三通の手紙を読んで

11 宮本輝「大雁塔から渭水は見えるか」前掲。

12 宮本輝「押し入れの中」（「サンケイ新聞」1977年12月3日）「危うく非行に走りかねなかったひとりの少年は、一冊の文庫本によって、わきめもふらず読書に専念する少年に代わってしまった」という。

13 井上靖の『あすなる物語』（「オール読物」1953年1月～6月）

14 宮本輝「十冊の文庫本」（「書標」1983年1月5日）には、つぎの十冊が記される。

レマルク「凱旋門」、ドストエフスキー「貧しき人々」、カミュ「異邦人」、ダビ「北ホテル」、石川達三「蒼氓」、高山樗牛「瀧口入道」、樋口一葉「たけくらべ」、三島由紀夫「美徳のよるめき」、井上靖「猟銃・闘牛」、徳田秋声「あらくれ」。

15 第22回 芥川賞受賞。

16 井上靖『闘牛』（「文學界」1949年12月）

17 宮本輝『地の星』（『流転の海 第二部』新潮社、1992年）

18 井上靖『猟銃』（「文學界」1949年10月）本文引用は、上記に拠った。

ほしいという依頼がくる。穰介の妻みどり、妻の従姉彩子、彩子の娘蓄子からの手紙が、蓄子、みどり、彩子の順に開封されていく。

彩子と家族は阪急夙川駅近くに住んでいる。彼女の夫・門田は、学位をとるために大学で研究中だったが、若い女との間に子ができる。彩子は娘蓄子連れて、離婚を決意。その後 穰介と恋愛関係を持ってしまいが、実は、門田のことが忘れられないでいた。

夙川が舞台であること、書簡体小説であること、また、離婚した相手に思いを残していることなど、設定において『錦繡』との共通点をいくつか見出せる。しかしそれ以上に注目すべきは、双方の登場人物たちが「宿命」や「業」といったものに苦しめられているという点である。

『猟銃』の彩子は、己の「宿命」や「業」を蛇に例える。

「貴方は、人間は誰も身体の中に一匹ずつ蛇を持っていると仰言った事がありました。(略)人間の持っている蛇とは何でありましょうか。我執、嫉妬、宿命、恐らくそうしたものを全部を呑み込んだ、もう自分の力ではどうする事も出来ない業のようなものでありましょうか。」

『錦繡』の亜紀もまた、己の「宿命」や「業」に苦しむ。

「私は、あなたを失ったことも、勝沼が他の女に心を移したことも、みんな私の業というものかもしれないと考えたのでございました。

(略) その自分の業をどうやって乗り越えたらいいのでしょうか。私はなすがままに、未来に向かってただ歩いて行くしかないのでしょうか。」

両者の違いは、彩子が自殺という形で自身に決着をつけたのに対し、亜紀が「何が何でも『今』を懸命に真摯に生きるしかないではありませんか」と、今を生きる決心をしたところにある。

この違いは、両作品の構成と時代背景のずれに影響されているものと推測できる。

『猟銃』の書簡が、一方的に届いたものであるに対し、『錦繡』は、往復書簡を時系列に沿って並べるという形式をとっている。彼らは、

手紙を書くことで他者を想像し、過去を分析し、新たな情報を得続けながら、互いに時間をかけて自己を知っていく。宮本輝は、その過程を登場人物たちに与えた。

さらに、宮本輝が描く時代は、井上靖が取り上げた終戦直後ではない。戦争を経験して戦後に親となっていく人々ではなく、戦後生まれの人々を中心に据えた。そのことが登場人物たちの考え方の違いにどう反映されるのか。次に考察していく。

## 5. 戦後生まれの宮本輝

宮本輝(本名宮本正仁)は、1947年に父、宮本熊市、母、雪恵の長男として誕生した<sup>19</sup>。

自らの父母をモデルにした『流転の海』<sup>20</sup>では、父親が子の名付けに際し、戦前は「皇室の人間にしか使えなかった」〈仁〉という字を選ぶ場面がある。係員は、父親の目に射すくめられて、しどろもどろに、「どんな名前をおつけになっても自由です。時代は変わりましたから……」と言う。戦後を象徴する場面である。

戦争を体験した親が、戦後に生まれた子どもを育てるといった背景を、宮本輝はしばしば阪神間を舞台とした作品に使ってきた。『流転の海』でも1947年に誕生する息子とその親たちが描写される。

これらの描写の中で特徴的なのが、周辺描写に阪神間モダニズムが描かれることである。戦後、旧居留地に米軍基地が出来、アメリカ文化の流入も激しかったが、それ以上に阪神間には、戦前からのヨーロッパ文化があった。宮本輝の作品は、むしろこのヨーロッパ文化に影響を受けるところが大きい。ここでは、『錦繡』、『流

<sup>19</sup> 団塊の世代、戦後第1次ベビーブームの生まれである。『宮本輝全集 第3巻』(新潮社1992年の後書きには、1970年の全共闘の時代にも「そうしたものとも無縁」に大学を卒業したと回想される。

<sup>20</sup> 宮本輝『流転の海』(第一部)(新潮社、1992年)

『転の海』に加え、『青が散る』<sup>21</sup>、『花の降る午後』<sup>22</sup>に描かれた戦後の阪神間モダニズムに注目する。

▶ 『流転の海』 (1982年～) 父 熊吾・母 房江	-----	仲仁
▶ 『青が散る』 (1978年～1982年) 父・父の仕事仲間パール	-----	夏子
▶ 『花の降る午後』 (1981年) 義父・義父の仕事仲間リード・ブラウン	-----	典子
▶ 『錦繡』 (1981年) 父・喫茶モーツアルトの主人夫婦	-----	亜紀

以上の四作品は、いずれも戦後育っていく子どもたちが中心人物となっていくが、彼らの親世代のことも、詳しく書き込まれる。

上記、表の左が、戦後に親となっていく人々、右の丸い囲みの中が、戦後育っていく子どもたちである。

『流転の海』では、阪神間モダニズムとして、母房江が思い出すパンの匂いが描写される。「幼いころの一時期、自分はいつも焼きたてのパンの匂いに誘われるようにして目を醒ましたものだった」と回想されるように、阪神間には戦前からパンの店が多くあった。ユーハイムやフロインドリーブら、ドイツ職人の店が代表的なものであったが、彼らは、第一次世界大戦で捕虜になって日本に強制連行された人たちである。収容所からの解放後、関東大震災で横浜に店を出せなくなった彼らは、居留地のあった神戸近隣に自然に集まることとなった。

戦後も、外国人が多い三ノ宮の「やみ市」<sup>23</sup>では、他の地域より小麦や砂糖が手に入りやすく、洋菓子文化の発展を加速させていく。

<sup>21</sup> 宮本輝『青が散る』（「別冊文藝春秋」1978年～1982年）本論で取り上げる夏子は、主人公の療平の想い人として登場する。

<sup>22</sup> 宮本輝『花の降る午後』（「南日本新聞」「新潟日報」「徳島新聞」「北日本新聞」1985年～1986年）本文の引用は、宮本輝『花の降る午後』（講談社文庫、1995年）に拠った。

<sup>23</sup> 『洋菓子四五年兵庫のあゆみ』（兵庫県洋菓子協会、1991年）には、「国際都市神戸は、在住する中国人らによって三ノ宮高架下などを中

この時代の流れに乗ったのが、『青が散る』の夏子の父と、フランス人のパールである。戦後すぐの1950年に神戸に小さい店を開いて以来、事業は着実な発展を遂げ、大きな工場を持つまでになった。本店以外に神戸に三軒、大阪と京都に四軒ずつの支店を拡張し、阪神間のデパートにもそれぞれ進出するまでになるが、父の死とパールの帰国とを受け、夏子にこの店の進退がかかってくる。

『花の降る午後』もまた、親世代の店を継ぐかどうかで悩んだ典子の物語である。北野異人館通りにある高級フランス料理店の店主であった義父に続き、夫もまた病で失ってしまった典子は、全く初めての事ばかりのレストラン経営に乗り出す。悪意ある店の乗っ取り計画に振り回されて困惑することになるが、それを助けてくれるのが、義父の友人である外国人たちである。だが、その彼らも、戦中は辛い思いを余儀なくされていた。

「ブラウンさんも、黄さんも、それに日本旅行中に第二次世界大戦が勃発し、祖国に帰れなくなり、ついにそのまま永住することに至ったソヴィエト人のアンナさんも、自分の味わった苦しみを滅多に口にしたりはしないが、途方もない屈辱に耐え、無数の挫折を乗り越え、いま異国の神戸という町で、それぞれの城を作った。あの人たちはみな、戦争中、敵国の人間として日本で暮らしてきた。ソヴィエト人のアンナさんは、ナチス・ドイツのゲシュタポと日本の憲兵によって両親を殺されたのだ。それでも生き続けた。」

阪神間モダニズムとは、華やかなばかりではない。阪神間モダニズムが形成されるには、多くの挫折や死がある。形成までに、このような過酷な過去があってもなお、阪神間モダニズムが人々の心の幸せへとつながるのはなぜか。そ

心に戦後すぐやみ市が出現、台湾糖が安く手に入ったほか、水あめ、小麦粉、バター、ミルクなど、菓子業者にとってなくてはならない製菓原材料が安く手に入ったことが説明される。

それは彼らが、「それでも生き続けた」からだ」と典子はいう。何かを存続させるということは、決して容易なことではない。過去から現在まで生き続けたという証によってはじめて成し得ることである。宮本輝の戦後世代の登場人物たちは、親や親世代の先人たちを通して、挫折を「宿命」として受け止めて生き続けた人々の努力をみつめ、理解することができるのである。

だから、夏子は、父の死後も洋菓子店の経営を続けようとし、典子は、夫の死後もフランス料理店を継続させようとする。

では、『錦繡』は、どうであろうか。

## 6. 『錦繡』における戦後と阪神間モダニズム

靖明との離婚の傷が癒えない亜紀は、実家のある西宮市香櫨園に新しくできた喫茶店「モーツァルト」に、しばしば立ち寄ることになる。

夙川沿いのこの喫茶店「モーツァルト」は、定年退職した老夫婦が営んでいる。店主は大正十年の生まれで、十六歳のときに、初めてモーツァルトを知ってからファンになり、レコードを集め始める。当時、元町や三ノ宮では、旧居留地などに住む多くの外国人に向け、戦前から外国のレコードが豊富に販売されていた。阪神間モダニズム文化の中で、彼の二千三百枚を超えるコレクションは収集されていったといえる。

「昭和十六年に徴兵され、終戦の年の昭和二十年の冬に、中国の山西省というところから帰って来た」彼は、「徴兵されて大陸で銃を構えているときでも、耳の中でモーツァルトの曲が鳴り響いていた」という。彼は、「モーツァルトの曲しかかけないモーツァルトという名の喫茶店を持って、それで老後を生きていこう」と決心する<sup>24</sup>。

戦争という悲しみの時間にあってもモーツァルトの音楽は、店主の耳に喜びをもたらしたらしい。戦後3人の娘の親となった彼は、1945年生まれの子の親世代に当たる。亜紀は、こ

<sup>24</sup> 戦後の日本でのモーツァルト・ブームも店主のレコード収集に拍車をかけただろう。

の喫茶店でモーツァルトのレコードを聴き、モーツァルトの音楽を、「悲しみと喜びの二つの共存」ではないかと語る。亜紀は、阪神間モダニズムの形成過程にある挫折や死といった、先人たちの過酷な過去を見つめることができる人物である。

その喫茶店「モーツァルト」が、火事に合い、焼け落ちようとするとき、その様を見守っていた店主は、亜紀（星島）に次のように語る。

「生きていることと、死んでいることとは、もしかしたらおなじことかもしれへん。そんな宇宙の不思議なからくりを、モーツァルトの音楽は奏でているのだ。星島さんはそう言わはりましたなァ」「モーツァルトは、きっと、人間は死んだらどうなるのかを、音楽によって表現しようとしてたんですよ」

ここにもまた、「悲しみと喜びの二つの共存」が語られる。老夫婦は、新しい挫折も「宿命」として受け止めて「生き続けた」結果、喫茶店「モーツァルト」を再建させるのである。

## 7. ドストエフスキー「貧しき人々」の影響

挫折を「宿命」として受け止めて「生き続ける」といったテーマは、先述の井上靖の『猟銃』の彩子にはなかった展開<sup>25</sup>である。では、このテーマを宮本輝はどこで学んだのであろうか。

宮本輝が、初めて手にした十冊の本<sup>26</sup>の中に、ドストエフスキーの往復書簡形式の小説『貧しき人々』<sup>27</sup>（1846年）がある。

「『貧しき人々』は、それから二十年後、私に『錦繡』を書かせた」<sup>28</sup>と自身で語るように、宮本輝は、ドストエフスキーの影響を強く受けたものと考察できる。

ドストエフスキーの『貧しき人々』は、少女と遠戚の男との往復書簡からなる。二人は出会

<sup>25</sup> 井上靖の小説では、彩子は自殺する。

<sup>26</sup> 宮本輝「十冊の文庫本」前掲。

<sup>27</sup> 本文の引用は、ドストエフスキー『貧しき人々』（米川正夫訳、古典教養文庫、2016年）に拠った。

<sup>28</sup> 宮本輝「十冊の文庫本」前掲。

える状態にある<sup>29</sup>が、しばしば会うことを世間的にためらうところから、手紙のやり取りが行われる。彼らが悩まされるのが貧しさであり、お互いがお互いを気遣い生きていて、わずかな金を、余裕があるときに融通しあって過ごしている。

少女は男に、「宿命」や「業」を受け入れた上で強く生きることを願う。「どうぞ、不幸にもなんにも動じない、立派な人になって下さいまし。貧乏は罪悪にあらずということを忘れないで下さいまし。」

手紙を書くことで、常に考える時間を持つふたりは、手紙を書くことで自己を分析し、自己を告白してもいく。「第一にあなたという人を知ったからこそ、私は自分自身をよく知るようになり、あなたを愛するようになったのです。」

彼らは、お互いを大切に思う気持ちを自覚していくが、その思いは二人の幸せに繋がるとは限らない。常に目の前の問題への対応を突きつけられる彼らは、相手のために自己犠牲も決意する。

井上靖の書簡体小説はミステリー仕立てで、三通の手紙で読者に謎が明かされる仕組み<sup>30</sup>となるため、手紙を受け取った側が何を感じ、何を得たかは描かれない。

しかし、宮本輝の書簡体小説は、ドストエフスキーのものと同じく、相手の手紙を読んで自分自身の考えを変化させた読み手が次の手紙を出し、それを読んだ相手がまた変化することが繰り返され、積み重なっていく。そのことで、登場人物たちが、徐々に成長していく物語となっているのである。

では、宮本輝の書簡体小説で、主人公たちが変化の末に掴んだものとは、何であったのだろうか。

## 8. 書簡体小説『錦繡』

「前略 蔵王のダリア園から、ドッコ沼へ登る Gondra・リフトの中で、まさかあなたと再会するなんて、本当に想像すら出来ないことでした。私は驚きのあまり、ドッコ沼の降り口に辿り着くまでの、二十分間、言葉を忘れてしまったような状態になったくらいでございます。」

これが、十四通の往復書簡の一通目の書き出しである。障がいを持つ息子を連れている亜紀が、Gondra・リフトで前の夫である靖明に十年ぶりで出会う場面である。別の女と心中事件を起こしていた靖明に、亜紀が後日手紙を出そうとしたのは、彼があまりにも変わっていたからだ。その尋常ではない変化に、亜紀は、靖明が平安な日々を暮らしてはいないことを直感する。

ドストエフスキーの作品との大きな違いは、手紙を書く二人が、この手紙のやり取りが始まってから、決して会わないという点である。つまり、手紙の相手は、文字からの想像とこれまでの記憶によってのみ立ち上がってくる。Gondra・リフトで偶然であった男女は、手紙のやり取りだけで過去を振り返り、今を語り合い、お互いの人生に直接干渉し合うことなく相手を理解し、そして再び別れていく。

受け取った手紙は、これまでのそれぞれの記憶に新しい解釈を加える。その解釈は新たな分析をもって、他者を改めて想像し、自己を発見し直すことに繋がる。次第に変化していく二人は、それぞれの変化を認め、「今」も「未来」もまた、変化する可能性を秘めていることを知っていく。

Gondra・リフトでの出会いの時、靖明は、「何をやっても裏目裏目と出る」「言わばそのどん底に落ち込んでいた時期で」あったという。

二十代で社長令嬢の亜紀と知り合い、五年の恋愛をし、次期社長の座も約束された結婚であったのに、再会した中学の同級生の無理心中に巻き込まれて新婚二年半で離婚となった彼は、今はスーパーのレジ係で靖明を養っている令子

<sup>29</sup> 自室の窓から、相手の部屋の窓が見える位置に住んでいる。

<sup>30</sup> 江戸川乱歩『人間椅子』（「苦楽」1925年9月）、夢野久作『瓶詰の地獄』（「猟奇」1928年10月）の書簡体小説の構成に近い。

と住んでいる。その靖明を見て、亜紀が想像したのは、「淋しさ」という感情であった。

「蔵王のダリア園で星を見ていたときの淋しさが、私にペンを取らせたのでございましょう。それは、十年振りに思いがけず再会したあなたの横顔の持っていた淋しさが私にもたらした余韻でもありました。（略）重傷を負って、病院のベッドに横たわっていたときだって、あんなお顔はなさっていませんでした。」

離婚して十年。心中事件があったとはいえ、亜紀の側からは明晰な意志というもののなかった別離で、言わば父の言うままに行動した結果であった。亜紀が靖明に読み取った「淋しさ」とは、むしろ亜紀の側の心情であったと思われる。それはおそらく、失ったものへの心残りであろう。

池内紀氏は「宮本輝が他人の記憶にしっかりと居つく」秘密として、彼がしばしば「失われていったものをとりあげた」<sup>31</sup>ことを挙げる。「失われていくもの、失ったもの、それがいとおいしい」<sup>32</sup>。『錦繡』のふたりも、それぞれ失った過去の時間に引きずられている。

靖明が「今」を生きることを半ば放棄してしまっていたと同じく、亜紀もまた、「今」を生きることを困難に思っている。父の進めるままに再婚して専業主婦となったが、大学の教員である夫の勝沼は教え子と関係を持ち、3歳の女の子をもうけて神戸にひそかにもう一つの家を持っていた。

亜紀は、燃え立つ紅葉を見ては恐ろしいと感じ、星々の果てしない拡がりを見ては恐ろしいと感じている。紅葉は儂げなもので、星空は永遠なるものを象徴する。対称的<sup>33</sup>とも思えるこれらに同じ印象を描く亜紀は、二つの相反する価値が同時に存在することを感じている。

<sup>31</sup> 池内紀「＜解説＞七つの修羅」

（『胸の香り』文芸春秋、1999年）

<sup>32</sup> 池内紀「＜解説＞七つの修羅」前掲。

<sup>33</sup> 宮本輝「『潮音風声』瞬間と永遠」（「読売新聞」1983年）には、次の言葉がある。

「瞬間は、すなわち永遠だと思えてくる。」

宮本輝は「錦繡の日々」<sup>34</sup>で、錦繡という言葉の意味を「汚濁、野望、虚無、愛、憎悪、善意、悪意、そして限りなく清浄なものも隠し持つ、混沌とした私たちの生命」として説明した。混沌と融合の世界。それは、『錦繡』においても生と死の問題に繋がって、「生きていることと、死んでいることは、もしかしたら同じことかも知れへん」という亜紀の言葉を生み出していく。

## 9. 戦後のモーツァルト・ブームと小林秀雄

「生きていることと、死んでいることは、もしかしたら同じことかも知れへん」という言葉は、モーツァルトの曲に向けてつぶやかれ、店主の心に強く残ったが、これは、彼ら個人の思いであると同時に、当時の日本という時代の声にも重ねてみることができる。そこには、戦後の重苦しい状態から軽やかな復興を願う日本のモーツァルト・ブームが背景<sup>35</sup>にある。

戦後のモーツァルト・ブームをまずけん引したのが、小林秀雄である。小林秀雄は彼の著作「モーツァルト」<sup>36</sup>で、「全く相異なる二つの精神状態の殆ど奇蹟の様な合一が行われている様に見える。名付け難い災厄や不幸や苦痛の動きが、そのまま同時に、どうしてこんな正確な単純な美しさを現すことができるのだらうか。」と述べた。モーツァルトの曲に相反する価値観が共存することが、戦中戦後の人々を勇気づけたことを評したのである。

『錦繡』に登場する交響曲は、1788年の6月に第39番、7月に第40番、8月に第41番が完成している。<sup>32</sup>歳<sup>37</sup>であったこの時のモーツァルトの身边は、前年1787年5月に父親レオ

<sup>34</sup> 宮本輝「錦繡の日々」（「主婦の友」1982年11月）

<sup>35</sup> 1980年もまた、石油ショック以来の経済不況から、バブル期へ移行し始めた時期である。

<sup>36</sup> 小林秀雄「モーツァルト」（「創元」第1輯、1946年12月）

<sup>37</sup> 宮本輝が『錦繡』を発表したのは34歳のときである。登場人物の亜紀は35歳、靖明は37歳と設定されている。

ポルトが死去、同年末に生まれた長女テレジアが翌年6月に夭逝しており、身内の不幸が続いていた。生きることの意味は死を理解しなければわからない。死を意識し、生を考えたモーツァルトの曲が、『錦繡』の人々の心をも動かしただといえよう。

## 10. 「生」と「死」の融合・連続性

『錦繡』で死が最も強く描かれる部分は、靖明の臨死体験（心中事件）の場面であろう。死に行かんとしている自分を見つめているもうひとりの自分は、「死によってその生命のすべてが消えて失くなるという考え」は、「人間の傲慢な理性によって作りあげられた大いなる錯覚」であり、「私の命そのものは、自分の背負い込んだ悪と善に包まれながら、決して消滅することなく続いて行く」のではないかと、「生」と「死」とが切り離せないものだと思える。この「生」と「死」の連続性は、靖明を罪の意識で押しつぶし、彼は過去を引きずり続けることになる。

「気が狂う程の苦悩と寂寥感と、得体の知れない悔恨に責めさいなまれていた」靖明の「現在」と「未来」は、「過去」に押しつぶされていたといえる。

それに対して、亜紀は、手紙で語る。

「過去なんて、もうどうしようもない。過ぎ去った事柄にしか過ぎません。でも厳然と過去は生きていて、今日の自分を作っている。『今』のあなたの生き方が、未来のあなたを再び大きく変えることになるに違いありません」。

小林秀雄は「モーツァルト」で、「命の力には、外的偶然をやがて内的必然と観ずる能力が備わっているものだ」と述べた。人間が抱えもってしまったどうしようもない「宿命」や「業」を、内的必然として受け入れることで、ここからくる悲しみや苦しみや障がいをどうにかして打ち破ろうという決意である。

小林秀雄が「強い精神にとっては、悪い環境も、やはり在るが儘の環境であって、そこに何

一つ欠けている所も、不足しているものもありはしない。不足な相手と戦えるわけがない。好ましい敵と戦って勝たぬ理由はない」<sup>38</sup>と述べるように、亜紀の手紙は、自らを見直して始まる再生の物語を導くことになる。そして亜紀自身も、靖明が「宿命」や「業」と向き合いつつある姿を受けて、自分の「業」をどうやって乗り越えたらいいかを自問自答し、「何が何でも『今』を懸命に真摯にいきるしかないではありませんか。私は断じて虚無やあきらめの世界に落ちていくことは出来ないのです」と、勝沼と離婚して障がいのある息子を自分が育てていくことを決意する。

さらに、その手紙を読んだ靖明もまた、令子と「今」を生きる決心をする。これらは、亜紀と靖明とのやり取りが重なっていくことによって導き出された結果である。亜紀が主導となった彼らの往復書簡の意義は、ここにあったと言えよう。

池内紀氏は、宮本輝が失われたものを描く作家だと指摘した後で、「この世の修羅にあって、たえず何かを失うのは当然の結果なのだ。だからこそ宮本輝はそれを受けとめるときのやさしさを語ってきた」<sup>39</sup>と述べた。

「どの時期、どの地、どの境遇を問わず、人々はみな錦繡の日々を生きている」<sup>40</sup>と宮本輝が語るように、亜紀と靖明の「淋しさ」は、「人々」の「淋しさ」でもある。宮本輝は、「人間の力」（『潮音風声』<sup>41</sup>）において、「この世には、不幸が渦巻いている。人間は弱い。虚無へと虚無へと傾いていく性を持っているものだ」とし、「どんな不幸をも内的必然と観じ、それと闘わしめる哲学を、そろそろ人は求め始めるのではないだろうか」と述べる。『錦繡』は、亜紀と

<sup>38</sup> 小林秀雄「モーツァルト」前掲。

<sup>39</sup> 池内紀「＜解説＞七つの修羅」前掲。

<sup>40</sup> 宮本輝「錦繡の日々」前掲。

<sup>41</sup> 宮本輝「『潮音風声』人間の力」（「読売新聞」1983年）



靖明を含めた心弱い人間たちを受けとめる、やさしさの物語であったのだろう<sup>42</sup>。

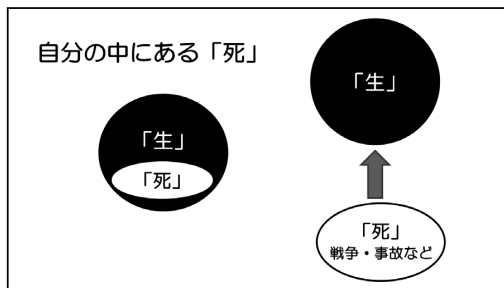
## 11. 西宮ゆかりの作家が探る混沌の世界

「生きていることと、死んでいることは、もしかしたら同じことかも知れへん」という、生と死の混沌と融合の様は、勿論、宮本輝だけが持つテーマではない。たとえばそれは、近代自然主義文学において志賀直哉が「城の崎にて」<sup>43</sup>で、「視覚は遠い灯を感じただけだった。足の踏む感覚も視覚を離れて、如何にも不確だった」と生と死の境の曖昧さ<sup>44</sup>を描き、「生きている事と死んで了っている事と、それは両極ではなかった。それ程に差はないような気がした」と描写したことと同質である。

ではここで、同じテーマが、同時代の阪神間を舞台に描かれた例をみてみたい。

まずは、少年期を西宮市で過ごした村上春樹の『ノルウェイの森』<sup>45</sup>を取りあげる。『ノルウェイの森』は、37歳のワタナベが、学生時代のことを振り返り<sup>46</sup>、20年前の1967年に神戸で死んだ親友キズキと、残されたキズキの恋人

直子との関係性の中で、「死は生の対極存在なんかではない」ことを心に刻む。「死は僕という存在の中に本来的に含まれているのだし、その事実は何れだけ努力しても忘れ去ることのできるものではないのだ。我々は生きることによって同時に死を育てているのだ。」



上記の左図で示した<sup>47</sup>ように、自分の中に「死」を抱え持っているというこの考えは、小川洋子（西宮市在住）の作品、『ミーナの行進』<sup>48</sup>にもみられる。物語は、1972年の子ども時代を振り返りながら語る形式で進む。当時小学校六年生の少女ミーナは、喘息の持病があるゆえにその発作をくりかえす。その時の様子を、ミーナが従姉の朋子に語る場面である。

「息ができない。もうあかん、と思った瞬間、視界が狭くなって、そこにあるはずのないものの姿が見えてくるんよ。（略）自分がものすごく遠い場所まで来てしめた気分になって焦るんやけど、そのうち、逆なんやなって気がつく。ここは遠くやない、近すぎる場所なんや。自分の心の中なんだって」。ここでも「生」と「死」は、同じ自分の中にあるものとして語られた。

1970年前後を振り返って語られる『錦繡』、『ノルウェイの森』、『ミーナの行進』が、共に同じ阪神間を舞台に「生」と「死」との混沌と融合の様を語っていることは興味深い。そこで、この時代の特異性と阪神間の地域性が、どのようにこれらの問題に影響しているのかを、次に考察しておきたい。

<sup>42</sup> 宮本輝は、『花の降る午後』の「後書き」で次のように語る。

「考えてみれば、人間にとって幸福とは何かという問題は、作家としての私の、最も重要なテーマであったのです。この大きなテーマは、おそらく終生、私のなかで変節することはないでしょう。」

<sup>43</sup> 志賀直哉「城の崎にて」（「白樺」1917年5月）

<sup>44</sup> 松永 K 三蔵（西宮市在住）の『バリ山行』（「群像」2024年3月）では、バリエーション登山で六甲山に登った主人公が、死ぬほど怖い思いするなかで、先輩が語る「もう自分も山も関係なくなって、境目もなくて、みんなとけあうような感覚」を、自分も経験する場面が描かれる。「城の崎にて」と同じく、生と死の境界線で、精神存在としての「私」が消滅している状態である。

<sup>45</sup> 村上春樹『ノルウェイの森』（講談社、1987年）本文の引用は、上記に拠った。

<sup>46</sup> 『錦繡』では、35歳の亜紀と37歳の靖明が、10年前の1970年に起こった心中事件で死亡した女性と残った靖明のことを振り返っていく。

<sup>47</sup> 右図は「死が生の対極存在」である場合である。

<sup>48</sup> 小川洋子『ミーナの行進』（「読売新聞」2005年2月～12月）本文の引用は、上記に拠った。

## 12. 贅沢な心の遊び

「小説というのは結局、物語なのだ、と書き始めたときからずっと思ってきました。学問でもなければ宗教でもない、贅沢な心の遊びだと思っています」<sup>49</sup>と、井上靖の影響を受け、宮本輝は宣言した。

井上靖は『猟銃』の執筆過程で、「戦争が終わって」「空虚を感じたとき、「贅沢な感じのする、遊びの作品を書きたいという気持ち」が非常に強くなったと述べる<sup>50</sup>。「長い戦争時代の反動のようなもの」が「なにか贅沢なものを、まったくの遊びを書きたい」と思わせたというのである。では、『錦繡』の主な舞台となったのは、どのような時代であったのか。

1970年代は、石油ショック、ベトナム戦争、反戦運動、急激な工業化による公害問題など、戦後急成長する日本に暗い影が落ちる。さらに、1979年にはソ連のアフガニスタン侵攻によって戦争の緊張が世界に走り、1980年のモスクワオリンピックを、日本を含む多くの国がボイコットする。そして、同年9月にはイラン・イラク戦争が勃発している。つまり、世界は戦争の緊張に満ちていたのである。しかし、『錦繡』には、当時の社会的緊張は描かれない。

『錦繡』には、社会的緊張を静かに受け止める住居空間としての阪神間の戦後が存在する。

「職」の場となる都市は、外圧として社会情勢の影響を強く受ける。しかし、「住」の空間である阪神間には、それとはまったく別の時間が流れていたということだ。

個人が、社会に振り回されることなく、社会情勢を遠望しながらその影響を己の中に取り込みつつも、己自身をしかと見つめることができる贅沢な時間。それが保障されるのが、『錦繡』の物語を牽引する亜紀が住む、阪神間の地域性であったといえよう。

## 13. おわりに

『錦繡』には、亜紀の家の庭に咲くミモザアカシアが印象的に描かれる。ミモザアカシアは、女性の自立を象徴する花でもある。国際連合は1975年の国際婦人年に3月8日を「国際女性デー」と定めた。イタリアではこの日を「ミモザの日」と呼ぶ。

『錦繡』が書かれた1980年前後は、田辺聖子が、阪神間の女性の自立をテーマに作品<sup>51</sup>を描き出していた時期でもある。

『錦繡』も、最後に亜紀の自立の意思が描かれる。亜紀は勝沼と離婚して障がいのある息子と生きていくことを決心するが、この自立には困難がつきまとうであろう。それでも一歩踏み出そうとする姿が最後に記されるのである。

阪神間の〈職住分離〉の土地の特徴も、バブル期を過ぎると、次第に変化の必要を迫られる。『錦繡』では、そのような新しい阪神間文化の誕生も予感させるような終わり方が選ばれた。

「向上してゆこうとしている人間を書きたい、生きてゆこうとして闘っている人間を書きたい」<sup>52</sup>と宮本輝が願ったように、『錦繡』は、戦後の阪神間独特の文化を背景にして、今を生きていく力を見つけ、向上してゆこうとした人々の物語であったといえる。

<sup>49</sup> 宮本輝「華やぎを縫い取る」前掲。

<sup>50</sup> 井上靖『わが文学の軌跡』(中央公論社、1977年)

<sup>51</sup> 田辺聖子の乃里子三部作『言い寄る』(1974年)、『私的生活』(1976年)、『苺をつぶしながら』(1982年)などがそれにあたる。

<sup>52</sup> 宮本輝「華やぎを縫い取る」前掲。